



とっておきの一枚!

展覧会の紹介動画を YouTube で公開しています

龍子記念館では、新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休館に伴い、名作展「身体のありか 龍子の人体表現」、名作展「旅行く心 龍子が描いた日本の風景」両展の展覧会紹介動画を作成し、ご自宅にいながらにして展覧会をお楽しみいただけるようにしました。(画像は「名作展「旅行く心」 紹介動画 vol.1」、2020年4月15日公開 制作：(公財)大田区文化振興協会)



大田区文化振興協会の YouTube チャンネルはこちら



第4号(改訂版)

発行：2020年5月31日
編集：大田区立龍子記念館

館のトピック

◆龍子記念館は、六月二日から再開します!
新型コロナウイルス感染拡大防止のため、令和二年三月三日(火)から、龍子記念館はおよそ三ヶ月にわたって臨時休館してきましたが、この度、六月二日(火)より再開することとなりました。

記念館再開時の展覧会は、名作展「旅行く心 龍子が描いた日本の風景」です。同展は、四月から開催の予定でした。しかし、臨時休館が続いて開幕できなかったため、会期を八月二十三日(日)まで延長して開催する予定です。日本画家・川端龍子が、「それまであまり手がけなかった風景画の方面に熟達したい」という思いを持って、戦後に始めた巡礼の旅から制作された作品を中心に展示します。龍子が晩年に取り組んだ風景画を通じて、記念館にいながらにして日本各地の名所や史跡へと旅立ってみてはいかがでしょうか。

また、今夏、龍子記念館では、企画展「葛飾北斎「富嶽三十六景」×川端龍子の会場芸術」を開催の予定でしたが、東京オリンピック・パラリンピックの開催延期に伴い、同展の開催を来年夏に延期することになりました。



龍子旧蔵の葛飾北斎「富嶽三十六景」全46点の展示は来年夏に延期します。(葛飾北斎《凱風快晴》1830-32年頃、大田区立龍子記念館蔵)

川端龍子が描いた迫力ある「会場芸術」の作品と、葛飾北斎の代名詞ともいえる「富嶽三十六景」を一挙展示する企画です。来年度、より良い展示となるよう準備を進めます。

2020年度 展示予定

- 名作展「旅行く心 龍子が描いた日本の風景」
～8月23日(日)まで会期を延長して開催の予定です。
 - 企画展「青龍社から東方美術協会へ 東方展のいまを見る」
9月5日(土)～9月22日(火・祝)
 - 企画展「青龍社の系譜 東方美術協会の歩みを見る」
10月17日(土)～11月23日(月・祝)
 - 名作展「時代を描く 龍子作品におけるジャーナリズム」
12月12日(土)～2021年3月21日(日)
- ※日程等は変更されることがあります。予めご了承ください。

館の基本情報

《所在地》

大田区立龍子記念館
〒143-0024 東京都大田区中央4-2-1
TEL 050-5541-8600 (ハローダイヤル)
URL <http://www.ota-bunka.or.jp/ryushi>

《入館案内》

- 開館時間 午前9時～午後4時30分まで
- 入館料 大人 200円、小中学生 100円
※65歳以上(要証明)、6歳未満は無料
※特別展の入館料は、その都度定める。
- 休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
年末年始(12月29日～1月3日)
展示替えの臨時休館

師の健剛なる精神を受け継ぎたい

日本画家・高頭信子

大田区立龍子記念館 学芸員 木村 拓也

■大田区に生まれ、日本画家になるまで

「私の原風景は、生まれ育った大田区池上にある」と日本画家・高頭信子（一九二九）は話す（註1）。池上本門寺の近くで牡丹園を営む両親のもとに生まれた高頭は、「馬込九十九谷の一番はずれ、池上本門寺山麓、池上谷の原っぱ」で（註2）、連なる丘の森と大森海岸遙かに富士を望む景色に囲まれ育った。そして、ロバの引く馬車が大森めぐみ教会の幼稚園の子どもたちを乗せて行くのを眺め、アンデルセン童話が好きだった少女の想像力はどこまでも広がっていった。

今も大田区に暮らし、大田区美術家協会・会長を務めて地域の文化振興に取り組む一方、団体展や個展等で精力的な活動を続ける高頭の日本画家としての出発点は、川端龍子（一八八五～一九六六）との出会いに始まる。終戦直後の一九四六（昭和二十一年）女子美術専門学校（現、女子美術大学）に入学した高頭は、友人が語る龍子作品の話に魅了され、古書店で手にした雑誌『美之國』（十三巻十号、一九三七年十月）の口絵に龍子が万里の長城を描いた『朝陽来』（一九三七年龍子記念館蔵）が掲載されているのを見て、その機知に富んだ作風に感銘を受けたのであった。それから、三年生となった一九四八（昭和二十三年）「若かったから猪突猛進という感じ」とにかく龍子先生に教えを受けたかった」と、龍子が主宰した青龍社に意を決して飛び込



前列右端に高頭信子、後列左端に安西啓明、その前に川端龍子、後列右端には牧進らが写る。第35回青龍展集合写真（1963年撮影、一部拡大）

んだ。しかし、まだ技術的に未熟で、龍子から厳しく叱られることも多く、何度も挫折しそうになったと言う。そのような時、龍子が高頭の母に伝えた「才能はあるから続けなさい」、「他の者にはないものを持っている」という言葉を胸に苦しい研究生時代を乗り越えた。

学校卒業後は大田区内の中学校等で非常勤講師として働きながら、青龍社・社人の加納三葉輝（一八九八～一九八二）にも教えを請いに行った。その時、加納のもとには、後に画壇の風雲児と呼ばれる横山操（一九〇〇～一九七三）の姿もあった。青龍社の強烈な個性の画家たちと切磋琢磨を続けた高頭であるが、徐々に満たされない思いも募らせていた。研究生は上達のために植物ばかりを描かされていたことから、高頭は風景を描きたいという強い思いを持った。そして、一九五三（昭和二十八）年の創立二十五周年記念青龍展に、大森にあった喫茶店・葡萄酒を描いた『F喫茶店』を出品したところ、見事に初入選を果たすこととなる。翌年の春の青龍展でも同じく街の風景を描いた『A街』を出品すると、龍子から「うまくなったものだな」と声をかけられ、この時はやはり天にも昇る心地になったと同想する。

■師の亡き後、その教えを道一筋に

初入選後は毎年春、秋の青龍展に入選し、一九五五（昭和三十）年に青龍社・社子、一九六一（昭和三十六）年には社友に推挙され、画家として確かな地歩を高頭は築いた（註3）。そして、春の青龍展では一九五四（昭和二十九）年の『A街』、その翌年の『雨』、一九五八（昭和三十三年）年の『街』、一九六〇（昭和三十五年）年の『風景』が春展賞、一九六四（昭和三十九）年の『雨後街路』が奨励賞を受け、受賞歴を重ねていった。入門当初は「男になつたつもりでやりなさい」と発破をかけていた龍子も、『雨』の授賞に際しては「男性的にきびきびしているのが好ましい」とその力量を認め（註4）、また、当時流行した抽象画に高頭ら青龍社の若手が傾倒し始めると、「こういう絵を描くならここに必要はない」といさめ、『街』の授賞に際しては「ぐつと具象を捉えるの取材は、自分としては賛意を表する。（略）具象を描いて、なおかつ観る者にその作品から抽象を想起せしめる態の作品をこそ望みたい」と高頭に大きな期待を寄せた（註5）。

そのような師弟関係も、一九六六（昭和四十二）年の龍子の逝去とともに幕を閉じる。さらに、龍子の死は、青龍社の解散を意味していた。しかし、青龍社解散を目の当たりにしても、「先生は青龍社は自分の生存中のみと仰っていたから覚悟ができていた」と（註6）、高頭はむしろ新たな画境を求め、私学短期留学生としてプラハへと旅立った。帰国後、多くの美術団体から勧誘されながらも、龍子以外に師はいないと無所属で制作を続けたが、青龍社に在籍した社人たちが創立した

東方美術協会に一九六九（昭和四十四）年から参加することとなる（註7）。この決断は、高頭を妹のように可愛がっていた龍子の三女・紀美子（一九一七～二〇〇一）と、龍子と親交の深かった俳人・深川正一郎（一九〇二～一九八七）の説得によるものであった。

東方美術協会は、一九六六（昭和四十二年）六月の創立から今年度で五十五回の展覧会を開催する歴史を刻んできた。その活動の中で高頭は、龍子が指摘した画家として自分が持つ「他の者にはないもの」を捉えようとしてきた。そして、「眼には見えないものの中にこそ本当に大切なものがある」という確信を得たと話す。高頭の作品において、強靱な筆触から詩情あふれる幻想的な光景が生み出されるのも、牡丹や花火のモチーフが具象から抽象へと転じていくのも、師からの教えを道一筋に実践しつつ、「見えないもの」を描き出そうとする高頭にしかできない表現方法であると言いうことができるであろう。

現在、東方美術協会が中心的な役割を担う高頭は、一つの信念を持つてこの美術団体の運営にあたっている。それは、青龍社解散後も「健剛なる精神面だけは断じて受け継いで欲しい」という龍子の遺志を守りぬくことである（註8）。高頭が考える龍子の「健剛なる精神」とは、作品と向き合う画家の意志の強さにある。そしてその力強い意志がみなぎる作品群こそ、東方美術協会の展覧会の魅力だと語る。龍子記念館では今秋、高頭信子をはじめ東方美術協会の活動に着目した展覧会「青龍社から東方美術協会へ、東方展のいまを見る」と、「青龍社の系譜 東方美術協会の歩みを見る」を開催予定である。青龍社から東方美術協会へと受け継がれた「健剛の精神」をぜひご覧いただきたい。

註

- ① 二〇二〇年一月に大田区池上において、筆者が高頭信子にインタビューを行った際の発言と、高頭信子『道一筋』（高頭信子日本画塾二〇一〇年）を参考として本稿を執筆した。なお、本稿では人名の敬称を形式上省略した。
- ② 高頭信子『日本画で楽しむキラリと光る小さな絵づくりに』日貿出版社、二〇〇三年。
- ③ 初入選以降の高頭は、一九六五年の春の青龍展を除き、青龍社の解散式が行われる一九六六年の春の青龍展まで出品を続けた。
- ④ 川端龍子「薦賞」『三十年度春の青龍展出品目録』一九五五年
- ⑤ 川端龍子「薦賞」『三十三年度春の青龍展出品目録』一九五八年
- ⑥ 『第三十五回青龍展出品目録』（一九六三年）『青龍辞 頂門一針』における「青龍展なる固有名詞は龍子が墓の中へ持って往く」という宣言を指す。
- ⑦ 東方美術協会は、時田直善、富田保和、大塚達夫、渡辺不二根、渡会伊良子、亀井玄兵衛、高山晴雄、佐々木邦彦、佐藤土筆、結城天童、水島裕の十一人の元青龍社・社人によって龍子の没後に創立された。
- ⑧ 註6の龍子の宣言に続く一文。